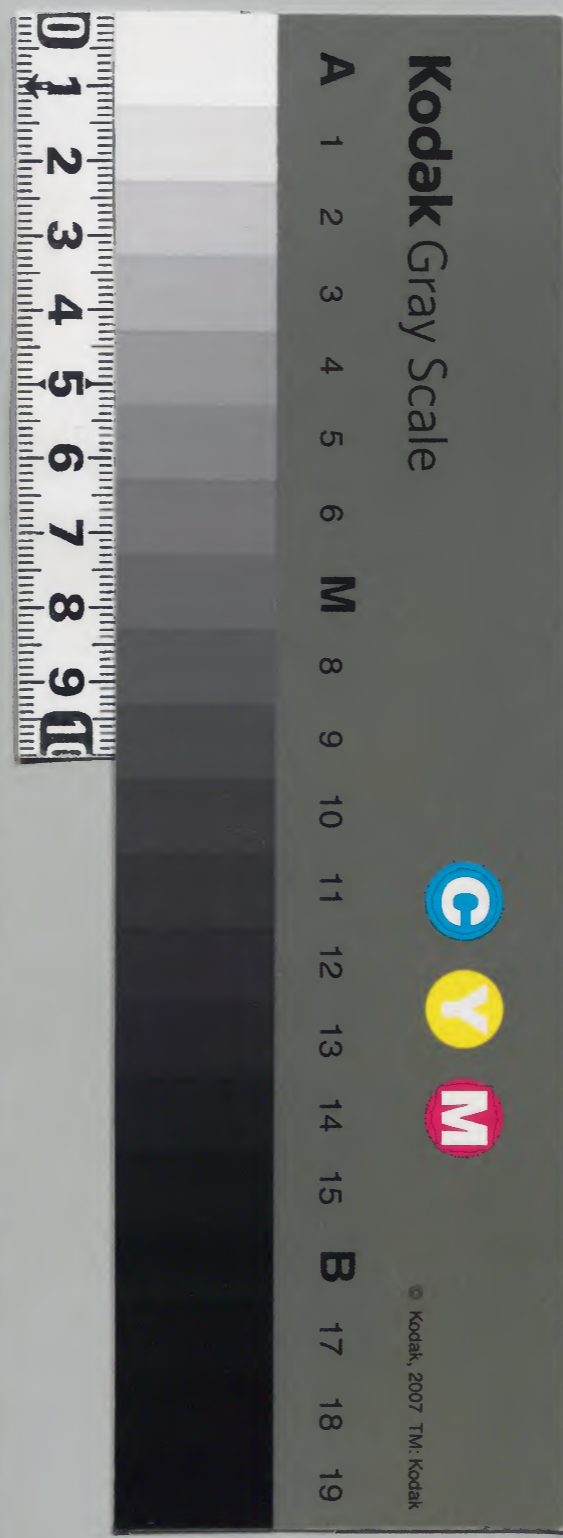


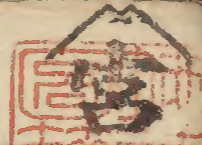
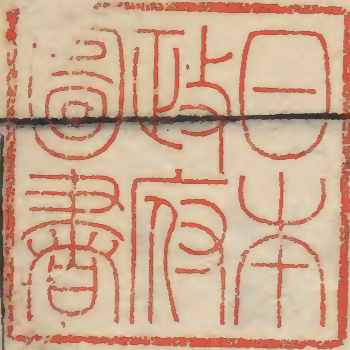
Handwritten text on a vertical strip of aged paper, likely a title or description, written in cursive Japanese calligraphy.

庫文閣内			
二七	函	二〇八	架
三五	冊	四八	號
五	類		

25

内閣文庫	
番號	和 36545
冊數	8 (7)
函號	177 1127





馮道
芝記表第六目錄
年行夏

臨時禮奠

文書三

示

嚴嶋道芝記卷第六

年中行直

正月元旦

御衣 毎年正月元旦寅の上刻よめんぞなるに職
 装束と改め各々御殿の大床まゝくお仕度大長柳守
 服御と名を冠親師と内床の納む儀式と成り人
 々しむ時より五年元旦よりなりし御衣と名
 なるも也御衣の白綾の地紋亀甲の織りたるもの也
 大長服長小袖と云と桐守の敷の後社司申す
 祀ふりや定敷あり清く志く志くありがごとく大
 又客人宮内衣をりて後御達茶社御内衣をりて

大長服記六

中ノ氏ハ傍俗男女子カキラサテ大床オク推参を
ヨクシテ御達茶神御酒ヲ戴ク大床昇殿ハ
職オシテハ子ノ位ノ社人常ハ帯殿御格子
下オクヨリ也参詣ノ外御格子ノ外三棟御殿
跪至世時分リハ徳コイナリ

同 卯刻御供 御境餅御法飯と申上郷社御社
外ニ地御前大明神ハ社家中後海

己刻御供 大ニ客ハ交御供并伏見糰餅と申心定敷
あり社司内約仕者恒例ノ式法ありと云
御新念家安全ノ御供と云

同刻 御供不残社参座屋ノ外ハ大般為

と御供也

客ハ大ニ花楸江あり
観音堂修心勤行 此沙門堂修心今日より七日迄

本刻 大ニ御前客ハ御前交御供申其敷
百餘リ社家内約参来之役人等知仕難餉
月以ハ御供也あり毎月朔早六日行

同 大ニ大明神ト上卿并五人ノ御前男知仕
并御供申其敷十膳

同 二文速回大明神御供申速回社人知仕

二日

外交御供 寅の上刻より嚴島社家後法して奉る元日此
表社御前御供 己刻元日此より同供傍御供元日此

舞樂 大元御供 元日此より
引歳承 延喜承

大元御供 元日此より
三日

大元御供 元日此より
神系初 大元御供 元日此より

大元御供 元日此より
同供傍御供 元日此より

大元御供 元日此より
御鏡餅を細分

奉揚板 白くおくはるる中此日取らるる
右書 上郷(五集)も舞食有古例あり

同 座主(五合) 紅司中を舞食有
御舞初 大元御供 元日此より

鍛冶 楢皮昨 尾師 政所役代 如仁

五日
禁裡御祈禱 大元御供 元日此より

大元御供 元日此より

振鋒 車副 林哥 按頭 還城子 好慶子

社供傍勅經 前の一

七日

七種神子

大元ふかた社家後神子と奉た

外家御供

廣海より社家申海海茶のり

社御供

社家申のりより帰帆の法を

御旨初

宿御社場舞のふく儀あり社

社申出仕祝師乞と勅せ

山大日堂修正

西方院法本坊一系訪乞と勅せ

九日

連敬初

座主一がわく具の 夏神宮親と註

子雪舟より廣寫連敬會所寄進と脇書より

十五日

御簾卸

己刻よあ社へ入りし御鏡餅を下し

社家中以戴元日よ捲し御簾と同日杉のり

住生講

供傍中親音堂より勅せ

太刀原院堂修正 社力より半と知ん

十六日

友社御供 月次

十八日

法華

大元御前より花經一初と後供傍知社家

人知社承明より承あり

十八日

規者簿

規者堂少く供僧勤じ毎月かくれり

九日

百子

ち元宮御祭と卿役有れり」と封分

同

中間某所御祭行役百子有れり」と封分

九五日

連款

天社五月迄毎月かくり

二月一日

外宮御供

社家後海あり

あ社御供

あり

仁王經

供僧禮座少く勤む七日法山毘沙門堂修

正勤行儀録と供

鏡座祭

二月三日のりれよほりとも亦山田園祭も

まのり正月末の亥日より二月初申の日まで十日

乃同祝師。嚴嶋はと郷。有所小入。實奇也。國府は

幣使代。府中少く。菟所。入。奇。式。法。古。例。も。と

か。也。二。月。初。の。末。の。夜。半。あ。社。御。祭。供。を。も。る。韓

津。あり。和。琴。あり。た。能。の。り。夜。祇。園。友。幣。社。の

御。所。大。幣。帛。敷。米。敷。布。を。持。奉。り。末。九。日。國。府。奉

幣。使。代。并。社。家。不。殘。嚴。嶋。海。海。系。和。を。供。り。林。屋

森。の。下。に。名。所。し。て。時刻。を。待。申。の。日。夜。半。の。か

て。社。家。より。七。度。半。の。使。を。遣。て。出。仕。行列。松。明。林

大刀。幣。香。教。米。殿。清。の。社。家。一。の。祝。師。為。棚
守。樂。段。比。内。侍。南。番。の。社。家。也。今。急。知。仕。の。一。祝
師。身。幣。代。一。立。合。て。身。幣。わ。り。祝。師。祝。詞。と
身。幣。代。祝。師。の。社。家。も。あ。わ。く。身。幣。代。祝。師。の。社。家。と
奉。公。府。の。社。家。も。ん。ぢ。や。う。の。舞。と。勤。む。之。柳。葉。を
祝。ふ。大。文。御。前。も。あ。わ。く。柳。の。舞。が。ん。ぢ。や。う。柳。葉。
亦。同。一。の。後。身。幣。使。代。退。か。り。行。列。ま。は。し
雌。雄。子。二。羽。青。銅。と。祝。詞。せ。る。中。定。例。あり。翌。日
より。御。清。道。秘。五。山。の。白。毛。魁。一。推。更。山。人。也
其。の。一。月。の。御。系。一。の。白。毛。魁。も。こ。や。り。也
酉。九。系。 翌。日。より。九。日。山。王。社。一。の。殿。清。上。柳。祝

師。古。家。為。棚。守。也。仕。柳。葉。舞。あり

法。華。懺。法。 信。傍。蓮。座。少。く。勤。し

二。之。申。御。系。 弟。二。乃。申。日。速。因。志。明。神。山。信。舞。系

彼。岸。蓮。 祝。者。堂。少。く。信。傍。の。法。院。蓮。法。彌

法。花。懺。法。 信。傍。不。殘。蓮。座。屋。少。仕

十五日

佳。生。蓮。 祝。者。堂。一。信。傍。不。殘。會。合。あり

三月一日

外。宮。御。信。 又。好。仕。 又。社。御。前。御。信。好。仕

上巳

あ。社。御。前。御。信。好。仕。 外。宮。御。信。 好。仕

深山毗沙門堂 借借勤行

十二日

御膳持

五社御持の御膳持を兼て御膳知仕

十三日

辻惠比須御系大文綱系代樂次相伴伎會合慶長慈故
あふ御系代よりとらむあり

十四日

樂屋報餉 十五日御系代試承あり酒の刻難餉御

酒肴平貝等とあり

大黒殿御持 相伴伎御餅磁子御持を兼てあり

十五日

同

寅の刻を兼てあり

大文御系 酒の刻社家中大文(如仕)同刻外借借中

客人より有座大文より声あり振舞あり後流

御進より声あり借借中客人より大文後殿より泰

着出大文大床より舞殿舞が舞方右の舞屋より

看座新曾利胡。一曲世時花より桃花を御階に

とありあり 中夫系 百歳樂 地喜樂

敬平 貴徳樂 陵王 納藤利 長慶子

十六日

五社御持御持 毎月此より

御持 十六日十七日初日後日下御持を勤む

巖鷲御使者少くも外社家神々所今立交りし勅也舞
 臺海内中にあり振舞系屋海内とて皆板と港後
 一見物の人影一

十八日

御意下

友社のみとありし事不親作也仕

四月一日

外宮御供

友社御前御供

仁王經 供僧徒在り仕

八日

法華

親善堂にくわり本堂に帳供傍知仕系

著座の法わり法花一部高橋と日より其申し堂

一 權を上げし法花終く後親善同帳



法華

五社御茶御供

十六日

五月一日

外宮御供

五社御茶御供

仁王經

まよわか

三日

外宮御茶

殿内御茶不致後御供をりて後鏡師と

御茶乃御茶と奉りて奉りて乃奉りて奉りて

御茶乃御茶と奉りて奉りて乃奉りて奉りて

警言

仕人

三行神窓

神馬

樂人

社司

諸職司

攝座主

内侍

神樂之座

御宿院所へ御供をりて御供をり



四日

寅乃刻同所少くあり獅子舞あり商刻亦あり

五日

寅乃刻亦あり平乃刻御洗米と供米あり刻
行列三日はらり。是乃刻以後鑄流馬あり米中刻
御供等あり米あり。後王納蘇利。外宮御供所

外社御前御供 端午御供と云社家如仕まらざり
二之宮御供 速田大明神端午御供を分り

十六日

外社御前御供例の如し

六月一日

外宮御供

外社御前御供

仁王経

二日

外宮御供 大文棚守りありて尚侍中乃氏余如
南社家神人齋食不残終日酒宴あり

六日

同

同所あり社司中御食也

八日

外勝儀 七日より十二日ありて大文之棟敷敷光
供傍家務主経信通

九日

外宮御供 大文棚守りありて社司中六日あり

十四日

同

同所にて御食後大の御供儀之集會

十六日

本社御前供儀の事

御舟組

大宮棚中より社系申報餉あり。本日

社系御進して松炭紐の御舟組あり御之艘

と船して座と張つて一蒲段紐の舟にて様

と造りおくは付たり花燈籠を約あり。お後大

焼灯あまの膳ふ

十七日

御船遊

申の刻子大の御舟と大の御舟正面

系物方社家各供儀六人お衣束をさやうふし氷を給

四人系御袴烏帽子にて儀を嚴重之たま大の

居正面にて炭紐を初む

船炭紐

大の御舟にて炭紐をさやうふし

外より押まらるる居の内御舟を合商の刻より炭

紐をさやうふし御舟を合商の刻より炭紐を初む

と後御舟炭紐へりおす御舟の中より樂をさやうふし

途中の御舟と云ふ御舟にて御舟を合商の刻より炭

紐を初む御舟を合商の刻より炭紐を初む

とさやうふしと大の御舟の内より清合の刻あり

とさやうふしと大の御舟の内より清合の刻あり

町入りして人形群集駁し別てと夜乃御簀笠を拜
まんと彩ひて正方近き後男女徒と仕りて後海
簀笠乃御舟れあとも記たた手群り地江希より附
傍ひ大なる右乃池まき来るもわり或は右乃右乃例の
あ脇又迴席れと一待もわり池地ま又舩舩小舩
艘とつり事と志く後御舩迴席志言えしと系
志づりくわり加陀と志く又右人宮乃正面と系
くわり又事系と奏するも御舟と云返廻し御
池を志く大え(漕ゆ)系と加陀かりゆく止る
し大えなる右乃まあく系を後のがり夜まふ
しと後系大えとおおく社家借借役人雜餉

廿八日

小後

大長棚より社家中雜餉わりぬが
ひと云

二十日

大後

殿高より外まは後海し御借を同
居れ正面し御く社家中水月乃後をす櫛と
乃て清邊しいけ系

七月一日

外ま御借

あ社御借御借 仁王経

大おのり 志後 志越 乙女子と奏ん

二日

延年願

借借一山まへ大棚より後おも借産

至少く鎌倉應仁乙丑之恒例す終日盛宴と延び
し知る役者も定む事也

七日

出下 又又の一遊小寶藏を窺ふ其室とて
如く申す刻小大御室前御掃子つと
里路人小形もやせも御室前御掃子つと
多れしと云ふ事ありと日まぐりて市場と云ふ
取社御前御掃 七ヶ所借も御母止女子と云ふ

十一日

は花懺法 遊ま(借借知仕)て執りす

十四日

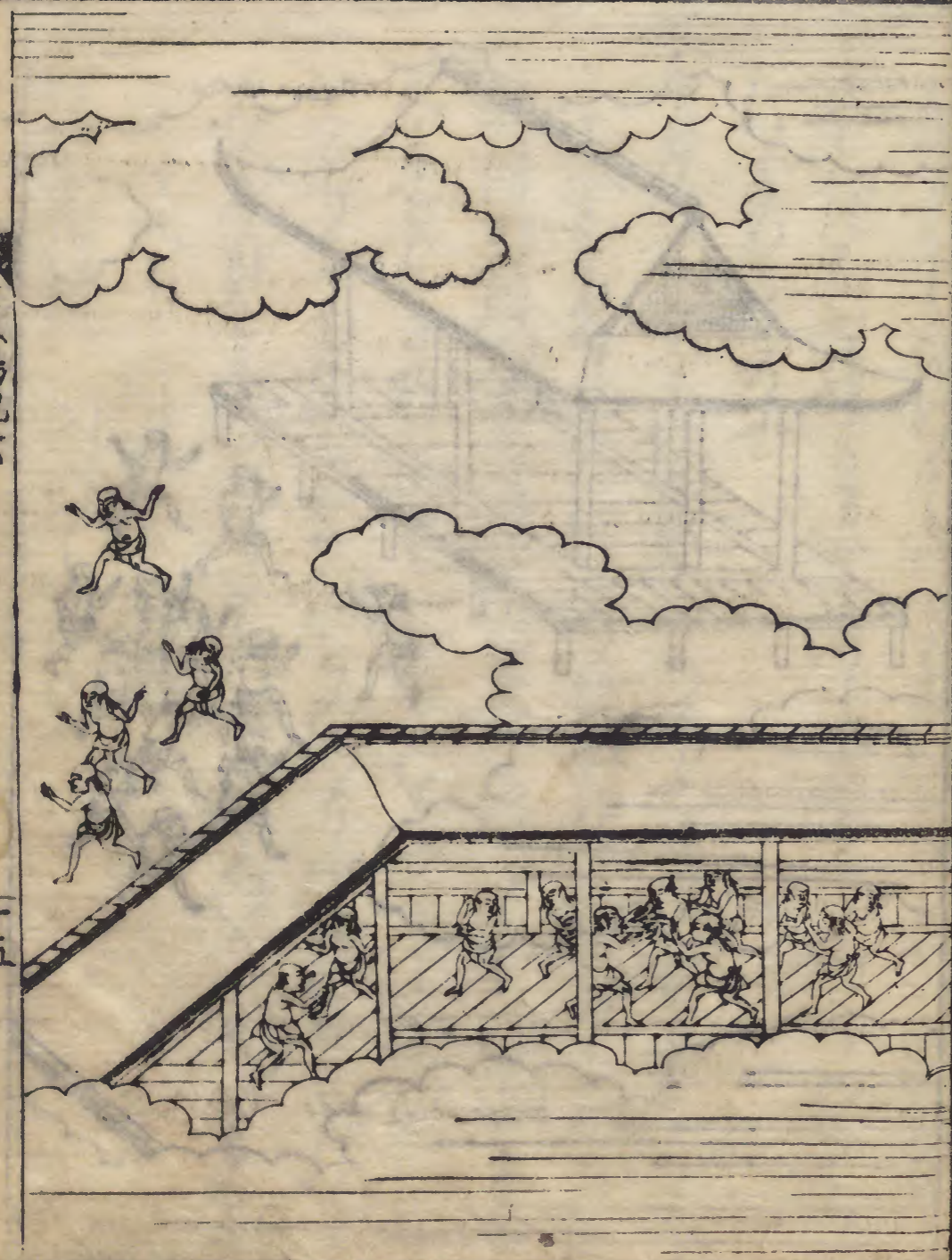
延年

夜一入て延びる事あり大御前
棟敷殿とて是とて借借の行直也其四方
臺を地盤といひ懸けとて西隅小梅松
と造り西平切つけ申以て人余乃人形を衣裳
取繋りて飾ふ大御前御掃の像あり其臺小
御灯をとりて殿をよめ約とて角の刻も借借
廻廊迄来着御掃に及び相違乃撞りて東
町西町両方より男子女子も残りす
と下れといふ事あり皆御掃の事也
又大御前に成く并連く鯉青と作り御掃
先西乃方すらう橋或は祝喜堂より橋を掃ふ

及書九六

十一

坂幸山王の御殿より他方の方の色の是踏の音山
 王乃縁もくけ親善堂の板敷もあはれぬへく貫中鯨
 音之度母かき取り我先中へ大まの御殿まけ事
 借傍の板敷より三株のふ先づひ二合榎とく由
 侍鳥帽子やく比肩を擦先立し掛声あり比肩二
 りのものいささ七尺余の角あり木を骨ありて扉を
 じく比紙を付くもとけく板借傍用はよりえりた
 刺乃行者乃約こいつありまの延年坊主とて傍一本板
 とまを背より四さよけて比盤乃下に外志のたがた
 行者一人ばくせくもといり比盤乃とぬ人形より
 い又二人俵系とまゆり傍六人利本打ありし者く
 纏る方とまき潮とく舞又見れ舞あり板敷細介とて
 わり此時東西乃氏子比盤と約をさる下にまきとけり
 わか一盤を窺ふまき採合うめく御殿廊下より
 とう一海へまき入山よりむきまき敷子へまき雷定
 震動もまき盤を消るかとりやしぬ祥殿乃板間へ行
 るより五月の月乃漂乃とくからく比盤をけりま
 むうく彼人形を奪ひ争ひ双方をとりけて取合
 御前をけりまきと奉とて或は裸乃れ細乃下にて
 或の後又の希りかきまきとくまきとくかきまき
 りずりまきにけりけ方にけり下にけり海より
 榎よりかきまき御地れ御まきまき海にけりまき



かきこり廻廊のあまの舞臺に群二群りしあそびた
 名をねめおのほを致ぬとらひてを窺ひ下ゆふこと
 学せかりしをわらふとよきか夜半も色大彩乃曉境も
 けがらふことどもを捜まりしむる事やまげしと東
 雲もくわ味爽とありぬ又幸わふ老子く仰首をさ
 どりぬし日三交むりいあういもやとねとくれ
 けうれも身い愛よおしかにうらび武ハをまて東
 小降ふもあつげぬねも幸か尻仲みから櫓の音迄も
 疎くしく耳よふけり仰首とゆくゆら若菜の穂
 多居乃表西ハすけらひいけりあく大音聲に仰首
 をゆきりこ名系うりけり色軟塗をまる勢地も元て



本此より細糸を何と云ふか耳も似く鼻もや
しとばもと得る方と云うれ細ありふくはふまの
程幸ありといふ

延年舞 先よ地盤をわたりすに信傍皆大まなりあ
くまへ系着す雲乃削り後殿組入いより各列^{はら}な
信傍の内つらき信一利本^ま打^ぶか^か素^そ備^び練^{れん}ら^らむ
太刀とらき扇とりら所^し殿^だよ^よし^しま^まま^ま勢^せび^びし
とらりて毛をくらや吹^ふ瓶^{びん}とのあり同^{どう}吉^{きち}所^しから
流^{なが}る^る耳^{みみ}圓^{まる}を^をら^らり^りび^びす^すと^と延^{えん}年^{ねん}の^のす^すり^りの^の舞^{まい}と^とま^ま也

十六日

本社御前御佐 例のこゝ

八月一日

外宮御供 ありけりし御子に折敷を合

外社御前御供 ありけりし

彼岸後 二月の御前御供に仕

十六日

外社御前御供 ありけりし

九月一日

外社御供 ありけりし 仁王経 ありけりし

三日

外宮御祭 御供を心殿湯社家中後海後式五月十日

三月より九月まで大長棚を敷き外社菴御供

承の御供に五月より一日より七日迄

祝如堂の巻の御供を勤行の御宿院所毎日御供七

日外也九月よりあり陵王 細蘇利

外社御前御供 金陽の御供あり

外宮を幸 儀式瑞午重陽の御前御供に後

ありけり。東越 陵王 納蘇利 長慶子

十二日

新嘗供 外社御前御供に新嘗を心秋を御供に

ありけり。大宮御前御供にありけり儀式殿を

燎 和琴 太篋 東越 乱声

振鈴 振願 子城系

十四日

大宮御祭 三月御祭同家の西の刻供儀者人々の殿
よ着座社家志儀速く迫廊よて早あり供儀大
まの抜殿子刻ふの家大座の舞殿もあ方舞も九
名好あ座より着座

新勢利古 一曲 万葉系 比久 敷平

凌王 貴徳系 納蘇利 長慶子

借華さく菊花あくもか之存桃花のどく

十五日

往生簿 親喜堂

十六日

あ社御祭御儀

十八日

大願大明神御祭 殿為社家中後海より大野の社人社
場をくま郷を速くしおる儀式古例よりてその致事
常ありす社家(難論)七五三の舞合意恒例之舞あ
し魚もれもとりとをもふ系人知はあありしにんや
の舞あり

御多喰飯 神あふく御儀者時五鳥よさひも心也
社あよりす町余まある御回の中より儀式清廻り
御儀のころしそれ五鳥は舞古より一雙年し相
續より三月は末より一雌鳥舞とけり子鳥一雙

雄く故は四月五日雄がすおたり中一すく
く雄がすすいりおたす中一すくお換の子と長
着して六月の末七月よりおいての子鳥といさひ
父法の子社まをかくともあつげたまふ中一すく
をり六月九月社に親子二はかへ便りかくし
のあけはよりかくなるといひし中一すく雄
雄け所へ海りて信佛をあげたまふ信佛あつて
より親鳥のひきおたす子鳥二双お換して翌日
いし湯廻り子鳥一はかへおたす中一すく
ふも思ふ厳格の御山よりいさかまき一里余
海を隔きるに空くに飛来り親鳥の名残の信
佛をあけおたす中一すく雄とまのあつていさかまき
五鳥例年にお換かくり

十月一日

外文御信 本社御前御信 仁王経 是れ

包浦御系 大文棚守社 敬神あり

初亥 初亥の日大文棚守社 社中集會

十月六日

本社御前御信 例を

十一月一日

外文御信 本社御前御信 仁王経 是れ

今伊勢御系 いさかまき御前御信 是れ

中如仕して御湯まらわしとあり

徳系社電 十月末の支那日より十一月初の申迄

統師と殿為の郷に是所は漢亦も支那日より

申の目まで十日の間中家く高声よ意對を

もせしむ地別を鳴抱を禁止來故も榮全等は意對

抱して包みて用ゆ

同未の夜 二月末の夜より 西社御前御信

韓神あり。和琴ありを節あり友幣社に社人

大幣帛。敷布。教糸を拍案も二月のころ。但初

の申は朔日よりある内は十月晦日未の夜あり

同申の事系 二月御前のこと

同御燈消 御志のころ 御夜を幣使代は神の年

等網りて後大宮御殿社中の御灯のころす志あり

の申は御よりあり春信教神の御人妻御の御た

あるとあり子息性剛強の族をくく恩賜の章を

信心はと御來御刻限ありて統師殿為の上知

西の法性靈櫻の系御を修業も一家お徳は授

少く群音傳外へはとあり一は御より

同答既し終んとも御禮構置の御事あり

又國府の社人明れ子の弄こいよのをうけ御皆一家

は使の中ありとも御秋終りて御燈つ度しとも

あなかりし御難是のゆるともより明年二月の御神

事まゝく御清通もあつたはるも寒き推ましか
よつず此故一山口^{山口}のまらもつり玉府のと御遊
か雄雄子二御酒をも月以載一と衣のめは御帆也
月日宗 二月のどう母止女子れ舞をよまると
はた憾は 信房経産屋よお仕

十六日

本社御前御侍 ありおろし

廿六日

天台又師誹 信房親音堂(お仕)

速田御社御侍 速田社人お取例のどうし

弟二之申 高月弟二の申は日速田の御侍は急二月

乃とくし御侍親愛膳数干神造酒瓶子よふ殿信房御
後海知はす

十二月一日

外交御侍 西社御前御侍 仁王経 くれし

八日

引声 客人御前経産あく信房^{信房}のあつた
わり親遊程乃信房御侍等約産す又九日を
十二日まゝく又西社御前経産あくいんせい

十六日

西社御前御侍 ありおろし

十七日

法華

客人御前御座り修傍如仕法花經讀

廿五日

御衣社毫 社目大友柳守内侍少く奇所は毫内
侍の内一人の御老と云り之一人の未嫁月障りき
と云りみて御衣裁縫の事を云り法式及日
りありたす定例あり

晦日

日山伏

申の下旬は修傍一山座主大智院より
令して郷食意の後成の刻におりんで座主の山より
大友の御殿より御老を先拂之すなりはり由
鳥帽子少く御座りしをわけたりすし申に山座

と押して十余人名傍十余束の杉明と云り
御座りしを吹きし二作は並敷のりる束束のり
御衣社内より翻り座主より御老を先拂之す
御座りしを吹きし二作は並敷のりる束束のり
御座りしを吹きし二作は並敷のりる束束のり
御座りしを吹きし二作は並敷のりる束束のり

御煤掃

上番の社目長冠川結ひ園又代下番亦立
御座りしを吹きし二作は並敷のりる束束のり

○年越の夜は三時より及ふ迄園を御座りしは
て御殿の座より幕を打戻風と園に御座りしは
あきまるとりりる御座りしは御座りしは

蔵をむくく武土社職お家と限りて農工商のありす
 ○寶殿の神器又家器の納めをの寄進の礼の神あり
 するを奉し或は清らうハ可と社中執り^{ウケテ}又臨時多礼あり
 ○捨るか多を社中ノ類の其本坊宿ま此式ありて廻ふそ
 介年中の御神の社はとらふはくまれあふ人き事
 五六のり人唯りりくおををりあふの今よりとめは
 腐毫よ及びぬ

蔵書道芝記卷第六

